

論文番号 227

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

TRUANCY AND PERCEIVED SCHOOL PERFORMANCE : AN ALCOHOL AND DRUG STUDY OF UK TEENAGERS

英国のティーンエイジャーの飲酒・薬物乱用と無断欠席・学業成績に関する研究

執筆者

PATRICK MILLER and MARTIN PLANT

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Alcohol & Alcoholism 1999 Nov-Dec; 34(6): 886-93

キーワード

無断欠席、学業成績、飲酒習慣、薬物常習、家族構成

要旨

(背景・目的) 学校を無断欠席 (ずる休み) することや学業成績が低いことは「問題行動」症候群 ('problem behavior' syndrome) の一部分と考えられている。この論文では、学校をずる休みしたり学業成績が低くなることを予測するための新たな因子を検討することを目的とした。

(方法) The European School Project on Alcohol and Other Drugs (ESPAD) survey の一環として 1995 年 3 月にイギリスで行われた調査のデータを用いて解析を行った。対象者は 1979 年生まれの 15~16 歳の生徒である。無作為に抽出した公立学校 60 校および私立学校 10 校が調査に参加した。全部で 9,126 人が対象者となったが、そのうち質問に完全に答えた 6,409 人 (70.2%) を対象に解析を行った。調査の信頼性と妥当性を評価するための薬物名を選択肢の中に入れ、それに対する回答状況をみた。

調査票は、性別、誕生日、家族構成、親の学歴、学校への出席状況、余暇活動についての質問、喫煙状況、アルコール依存症 (飲酒歴)、大麻などの違法薬物の使用に関する質問から成っている。

従属変数として、「学校を何日無断欠席したか」、「学業成績の状況」を用いた。また、独立変数としては、「家族構成」、「たばこ、アルコール、違法薬物の使用」、「人口統計学変数」、「生活習慣、性格」を用いた。

(結果) 「過去 30 日間に学校を欠席したかどうか」と有意な関係が認められた変数は、家族構成 (両親ともにいるか)、親の学歴 (両親とも大卒でないか)、精神病的症状の保有状況、趣味の保有状況、両親からの世話を受けている状況、今までのアルコール飲酒・喫煙・溶剤吸入・大麻使用・違法薬物使用の回数であった。性別とは有意な相関関係が認められなかった。「学業成績」と有意な関係が認められた変数は、性別、家族構成 (両親ともにいるか)、親の学歴 (両親とも大卒でないか)、精神的症状の保有状況、趣味の保有状況、両親からの世話を受けている状況、今までのアルコール飲酒・喫煙・溶剤吸入・大麻使用・違法薬物の使用回数であった。また、両親の構成 (父親、母親の有無によって 4 つの組み合わせに分類) と「過去 30 日間に学校を欠席したかどうか」、「学業成績」との関係を見ると、両親ともいるものとそれ以外の 3 グループとの間に有意差が認められた。